

つるにつかまりながら降りる。その下のF2はナメ滝でなんなく通過。左岸より15mの滝をかけて小沢が合流した。そしてそのすぐ先に橋ゲタが出てきた。地図にある橋ではないが、もう沢は終わりに近い。軽く腹に入れて歩きはじめる。すぐ左岸から支沢が入り、旧国道の橋。13号国道は目の前だった。 (記。)

下降開始(14:35)——13号国道(17:15)

摺上川流域の沢 1981年の記録

吾妻につづく我が会の地域研究の第2弾は摺上川流域である。この地域は高い山こそないが、非常に奥が深く、沢の数も多い。地味なだけに、ほとんど資料らしい資料も得られず、自力で開拓してゆく楽しみがある。

本年この山域で、夏合宿の時に遡行した12本の他に、いろんな時期に計10本の沢に入った。それらを紹介しよう。

白根沢

1981年5月31日

I

白根沢入口に車を置いて遡行開始。きれいな冷たい水だ。10分も歩くと最初の小滝が出てきて、そのあとナメとなる。白根沢の特徴はこのナメにあり、途中部分的に途絶えることはあっても、ほぼ源流まで続いた。右に左に小さな屈曲をくり返す沢を登ってゆくと、左岸によく手入れされた跡跡が出てきた。部分的にコンクリートの石積みなどがあって、造林用として、あるいは農業用水の管理用として、ひんぱんに利用されているようだ。8時45分、取水ダムに着く。半分こわれかけた小規模な取水ダムである。左岸の跡跡は、ここから幾分不明瞭となったが、まだ先へのびている。よく育った杉林の中をぬけて、9時丁度、地図に水線のある最初の支沢(仮に白根一ノ沢とよんでおこう)出合に着く。滝の出てこないのがさみしい。「こんな岩質なんだから、傾斜さえついてくれれば滝になる。」と先に望みをたくす。9時20分、2番目の支沢(仮に白根二ノ沢とよぶ)出合。あいかわらずナメの連続だ。左岸からガレ沢が2本合流する。どちらも、碎石として今すぐ使えるような大量の土砂を、白根沢にむけて押し出してきている。やがて、植林後10年程を経過した杉の若い造林地に着く。かすかに続いていた跡跡もここで終わっている。またしばらくナメを歩くと、右

岸から30m程のスラブ滝が入っている。たまには滝も登りたいので、この滝を直登してみる。沢幅がせまくなり水量も減ってきた。ミスナ、アイコなどの山菜をつみながら登る。11時40分沢が二分した。右沢はすぐ上でカレ沢となっているが、先はまだありそうである。左沢はすぐまた二つに分かれ、左側は30m程の滝となっている。3人がそれぞれの沢を少し登って偵察した結果、結局一番左の沢に入る。30mの滝を直登した萩原君の弁、「一番最後のところがちょっとしんどかった」。すぐ水もかれる。カモシカの足跡のいっぱいあった。12時10分。

(記)

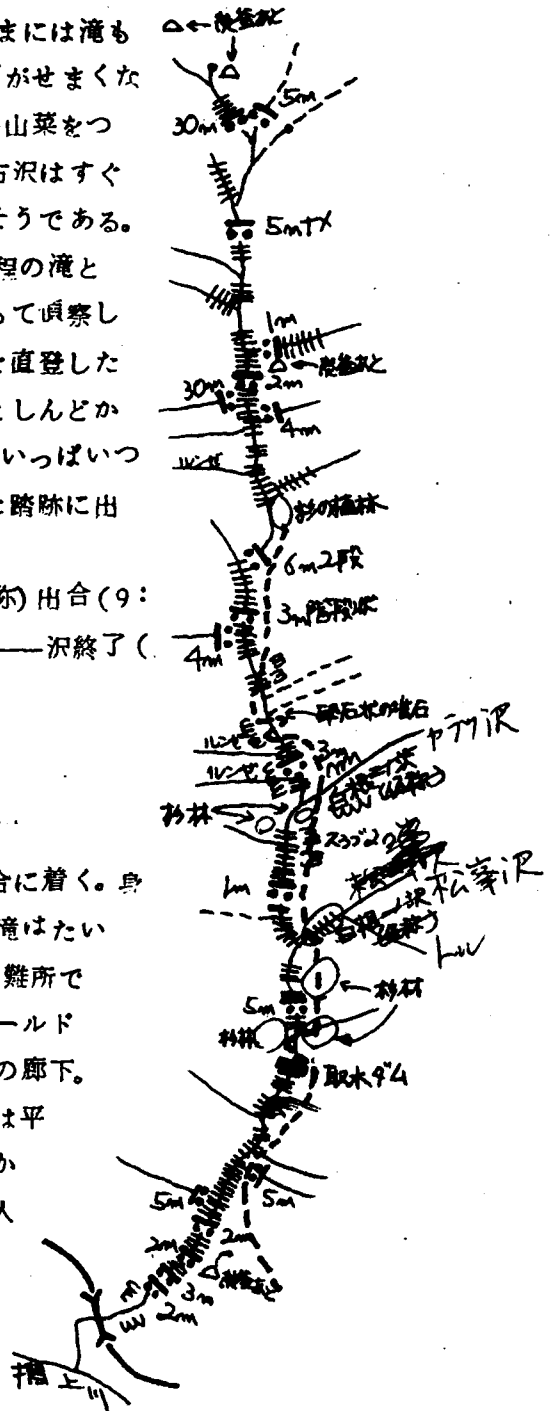
白根沢出合(7:50)——白根一ノ沢(仮称)出合(9:00)——白根二ノ沢(仮称)出合(9:20)——沢終了(12:00)——踏跡(12:10)

手沢

1981年7月12日

L₁

鳥川林道起点から徒歩約1時間で手沢出合に着く。身仕度をして出発。出合から暗い廊下が続く。滝はたいしたもののはかかっていないが、ちょっとした難所である。へつりで通過する。岩は花崗岩層でホールド豊富。フリクションもよくきく。続いて第2の廊下。小滝が2つかかるが、へつりで通過。この先は平凡な河原歩きとなる。イワナの姿を見る。なかなかの大物がいる。数も多そうだ。普通の釣人は下流の2つの廊下あたりで引き返していくせいだろう。ちょっとした深みにいくつもの姿をみる。前方から犬のようなものがかけてきた。カモシカだ。しかもまだ子供のカモシカである。我々の目前でU



白根沢(作図:)